
とある世界の主人公達

K・W

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の主人公達

【NZコード】

N94520

【作者名】

K・W

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の原作22巻以降のi-f談

第三次世界大戦が終わった後の世界

第一部（前書き）

とある世界の主人公達

ヒーローズ

原作22巻以降のif談です。

原作見てない人はネタバレありますので注意。

小説初めてなのでご容赦下さい。

第一部

一つの戦争が終わった

一方通行、打ち止め、番外個体はロシアのとあるホテルの一室にいた。

そこへ
学園都市の回収部隊を撃退しきりに至る。

「ひやつほーーい。元気にしてるかにやーー」

その一室に飛び込んできたのは

金髪にサンゲテスかけた男

土御門元春た

「めでかなんてこんなとこにいやがるんだアおおい」

一方通行に恩をしそうに進む

一回取た。お前らはホレど一緒に学園都市に帰るんだ」やー

それに、
と土御門は続ける。

「学園都市は今焦つていてる。アレイスターのメインプランであるお前も上条当麻も、戦争が終わつたにも関わらず学園都市に帰つてき

てないんだからな。反撃するなら今しかないんだにゃー

一方通行は眉をしかめる

当然だ。学園都市第一位の自分以外にもメインプランが存在するのだといつ。

しかもその名前はかつて学園都市最強を2回も倒した男。

「あの二下は一体何者だア？ロシアにもいたけどよオ」

土御門は一ヤリと笑い

「あの右手は幻想殺しと呼ばれてる。右手に限りあらゆる異能の力を打ち消す能力だにゃー。ちなみに戦争の首謀者を倒したのも上条当麻ぜよ？まあ今は行方不明なんだけどな」

一瞬寂しそうな顔をした土御門だったが真面目な顔つきに戻る。

「お前も魔術師つてやつを知ってるな。0930事件もアビニヨンの暴動もイギリスのクーデターも第三次世界大戦も魔術師によって始まつた事ぜよ」

一方通行は今は眠っている打ち止めと番外個体に一瞬目線をやり、土御門の方に目線を戻す。

「そしてその事件の全てに上条当麻が関わってりる。まあ上やんについてはこれぐらいでいいか」

一方通行もそれ以上は興味がないらしく次の話題に移す。

「で、反撃つてのは具体的にビオするつもりだア、窓のないビルでもブツ壊すつもりかア？」

土御門は一矢りと笑い

「別にオレたちは戦争を起しそつもじやないんだにゃー、戦争を起こせるつていう勢力を作ることが大事なんだにゃー」

つまり、と土御門は告げ

「学園都市そのものを壊すわけではなく、学園都市を裏で操つてるやつらから学園都市を解放することだよ」

「ギャハハハハハハハ、いいね、いいねヒ、面白ヒよ、汚ねヒ、『ミミ掃除は『グループ』の時から変わつてねエよなア』

土御門は説明を続ける。

第一部第一話

「あー、あとたまたまロシアに上条当麻以外で学園都市の学生ながらも戦争に参加した者がいるんだにゃー」

一方通行には心あたりがあった。『グループ』の仕事中、そしてリザリーナ共和国で再び出会った一人の少年と一人の少女だ。

「お前らを回収する前に先に回収しどいたぜよ、あいつらにはもう話はしてきたにゃー。今から呼んでくるからちょっと待ってるんだにゃー」

そう言つて土御門元春は部屋から出て行つた。

「てめえらここまで寝たフリしてやがる」

その声と共に一人の少女が目を開いた。

そして

「反撃開始だね、ヒミサカはミサカは高ぶる感情と貴方には戦つて欲しくない気持ちを混同させながら言つてみたり！」

「面白くなつてぐる展開にミサカ色んな悪さを思つてこやつ」

一方通行は呆れ氣味に

「てめえらは戦略外だボケ、病み上がりと包帯まみれがハシャイでんじやねー」

そう、一方通行は彼女たちを戦わせる気はない。
学園都市にとって彼女たちは驚異でもなんでもないのだから。

第一部第二話

神裂火織はイギリスにいた。上条当麻搜索部隊に加わらうとしたが第一線で働いていた神裂火織を含む新生天草式、アーニー・ゼ部隊は傷を負つていて足手まといになりかねないということで他の部隊に任せたのだ。もちろん聖人である神裂はまだ動けるのだが。天草式の皆を置いて一人だけで行くという考えは今の神裂火織にはない。

「まだあの少年は見つからないのですか」

教会世界には何の関係もないとある少年を思い浮かべる。

そこで神裂火織の携帯電話が鳴り出す。

土御門元春がホテルの一室から出た後に電話をかけたのだ。

「はい、神裂です」

平静を装つてるが神裂の声には生気がない。

当然だ。先日まで戦争の第一線で戦い、戦争を終結させたとある少年は未だ行方不明なのだから。

「なんの用ですか？貴方がこちらにも顔を出さず裏でコソコソ何をやつてるかは知りませんがこちらも忙しいので手短にお願いします」

神裂は土御門の電話を鬱陶しそうに答える。

「つてことは上やはまだ行方不明か」

「そんなことよりと土御門は告げ、

「ねーちゃん、オレと取引しないかにゃー」

神裂火織は驚愕する

「……んつ……なつ……ふざけているなら切れますよ……」

「ふざけてなんかいないぜよ。この携帯電話も盗聴されないように施してあるし通話記録も残らない、それにこの取引はねーちゃんが恩を感じてこる上やん絡みだぜい」

神裂火織は理解ができない。上条当麻は行方不明だ。その上条当麻絡みというのが理解できないのだ。

「あなたは上条当麻の現状についてなにか知っているのですか?！」

学園都市や『必要悪の教会』の裏でコソコソ動き回っている彼ならあの少年について何か知っているかも知れないと思ったのだ。

しかし、

「上やー、上やんについては何も知らないにゃー」

簡単に否定された。

「でもこれだけは分かる。イギリス清教は学園都市と戦争をしようとしている。その戦争を止めるには上やんが必要つてことも上やんは必ず戻つて来るつてことも」

神裂火織は耳を疑つた。

「イギリス清教と学園都市が…戦争？」

「ああ、学園都市統括理事長の正体はエドワード・アレクサンダー又の名をクロウリー」

「その意味が分からんねーちゃんじゃねえだろ、アレイスターは上やんに命を救われたフイアンマを殺しに『外』にでてきた」神裂火織は頭が混乱し、手を額につける。

「おそらく『外』に出てきた時に魔力が感知されたのだろう。まあフイアンマは生きていたらしいがな、わざと生かしたのかフイアンマの実力なのかは分からんがにゃー」

「それで取引というのはなんでしょう？」

神裂の言葉に真剣味が増す。

「オレたちは戦争を止めたい。こんな下らないことに関係のない学園都市の住人やイギリス人が巻き込まれるのは間違っている。それは第三次世界大戦にしてもそうだった。だからオレたちは繰り返しちゃいけない」

神裂は土御門の言葉に賛同する。

「それで私はどうすればいいのですか？」

「ねーちゃんは天草式とアーニーゼ部隊を連れて聖ジョージ大聖堂に向かつて欲しいにゃー、そこで禁書目録とスタイルと合流し学園都市へ来て欲しい」

「しかし、イギリスからどうやって学園都市へ！？」

神裂が驚くのも無理はない。聖ジョージ大聖堂からインテックスを救い出すのも厳しいのにそれから空港へ行き学園都市へ向かうまでにどれほどの追手がくるか分からない。

「その辺は心配しなくとも大丈夫だにや、オレも今はロシアに入るし学園都市へ行くついでにそっちを拾つていく。学園都市に入つたら多少戦闘になるかもしけないが一旦落ち着いたら奴らも兵器の無駄遣いはしてこないぜよ」

彼は本当に無茶苦茶な事を頼んでくる、と神裂は口元を緩めた。

「それで学園都市へ行つたとして私たちはどうするのですか？」

そう。問題なのはそこなのだ。どれだけ天草式やアーネーゼ部隊が人数が多くて聖人が一人入つていようとその程度なのだ。
学園都市やイギリス清教からすればそんな戦力はちっぽけすぎる。

「取引するんだよ。詳しいことはまだ言えないがさっき言つた通りオレたちは戦争を止めたために動いてる。信じてくれると助かる。もしオレたちに手伝えないというならそれでも構わない。どうする？ 神裂火織」

しばらく沈黙が続いた

だが神裂の心はすでに決まっていた。

「土御門、私の魔法名を忘れましたか？」

土御門はほつとした表情になる。

「感謝するぜよ、ねーちゃん。じゃあ聖ジョージ大聖堂に着いたら連絡してくれ」

「分かりました。それでは」

神裂火織は電話を切る。

（さあ、やるべきことは山積みです。部隊の説得にスタイルとインデックスと合流、そして…）

一人の聖人が動き出す。

とある少年の生存を信じて。とある少年が望む誰もが笑って誰もが犠牲にならないハッピーエンドを信じて。

電話を切った土御門は一人咳く。

「さて、こんなにうまくいくかにゃー」

そしてホテルのラウンジに辿り着く。

学園都市最強のレベル5第4位とレベル5の8人目候補、そして

レベル〇だが愛する者のためならばヒーローになれる少年がそこにはいた。

第一部第四話

一方通行、打ち止め、番外個体、浜面仕上、滝壺理后、麦野沈利、土御門元春の七人は一方通行達が泊まるホテルの一室に集まつた。

二人がけのソファーがテーブル越しに二つあり、そこに土御門と麦野、浜面と滝壺が座り、打ち止めと番外個体はそれとのベッドに腰掛け、一方通行は壁にもたれでいる。

「まあそれぞれ面識はあると思うがとりあえず紹介と状況説明しつくせい」

土御門が口を開き、説明を始める。

それぞれの能力のこと、『妹達』のこと、『第三次製造計画』のこと、暗部間抗争はあらかじめ仕組まれていたものだったということ、『バラメータリスト』『素養格付』のこと、学園都市以外の超能力以外に『魔術』という異能の力があり、それを使う『魔術師』が世界には存在し、自分もその中の一人だということ、第三次世界大戦がその『魔術師』によつて引き起こされたということ、そして第三次世界大戦の首謀者を『上条当麻』が倒したこと、また行方不明だということ。

一時間以上の説明にも関わらず、話を聞いている者は土御門の話が終わるまで誰も口を開かなかつた。

土御門の説明が終わる。

打ち止めは退屈すぎたのかベッドでそのまま寝てしまつてゐる。

緊張に耐えれなかつたのか浜面が口を開く。

「オレ達『アイテム』しか知らないはずの情報をなんで知つてんだよ、クソッ！」

「オレは多角スパイだからな。いろんな組織と接触し、もちろんその組織の『裏』も見てる。つっても『素養格付』についてはかなり最近に知つたから安心するにゃー」

「『素養格付』だの『魔術師』だとそんなんはどうだつてい。それでオレたちはこれからどおするつもりだア」

「私も第一位の意見に賛成よ。ここに滞在していてもいつ学園都市の部隊が来るかわからない」

一方通行や麦野が『魔術師』や学園都市の『闇』について興味ないのを察してか土御門は再び説明に入る。

「まずオレ達は今からイギリスに向かつ。そこで魔術師とか合流し、学園都市へ向かう。方法についてはオレが乗つてきた超音速旅客機で行く」

「おイ、ちょっと待て。なんでそこで魔術師とかこうやつが出てくる。これは学園都市の問題だろオガ」

「あー、悪い。説明不足だつたにゃー。」

そこで土御門は、アレイスターの正体が魔術師だといつことやそれがイギリス清教という組織にバレて学園都市とイギリスが戦争を起こそうとしていることを説明する。

「『J』の作戦は学園都市を『闇』から解放すると、その戦争を事前

に食い止めるのも兼ねてるんだにゃー。それで後者の目的の関係で魔術師たちにはこっちの手伝いもしてもいい。逆も然りだ」

さうに土御門は続ける。

「それにお前達のためにもこの作戦は必要なんだ。お前達だつてこれから学園都市から逃げながら生活を続けるなんてできないはずだし、学園都市に帰つたとしても何かしらの弱みを握られて利用されるのがオチだ」

しばらく沈黙が続いた。

それぞれ納得する部分があるのだな。

「これから合流する魔術師については心配いらない。また戦争が始まり、それによつて関係ない人が犠牲になるのが見てられない連中だ。説明はとりあえずこれぐらいでいいだろ。作戦についても隨時教える。まだメンバーについても一握りだからな」

(クソッ！結局こいつの言う通りにするのが最善策ってことかよ。
何があつてもオレは滝壺と麦野を守るだ。)

「おい、行くぞクソガキ！置いてくぞー！」

「んー、退屈な作戦会議は終わったのつて、ミサカはミサカは貴方を追いかけながら聞いてみたり」

「あア、今からイギリスだア」

そして七人はホテルの一室から出る。

土御門が用意しておいた超音速旅客機に乗り、イギリスへと。

とある少女の父親は世界最悪の魔術師と呼ばれる悪人だつた。

父親のせいでは家族は命を狙われ、バラバラになり、親戚も友人も家族も死んでしまつた。

大好きだった母でさえ。

少女は奇跡的に命は助かり、身分を隠し、教会に身を置くことができた。

そして少女は決意した。

少女は目的の為に努力する。

父や母が使つていた魔術を勉強し、それを極めようとした。

目的の為なら何でも利用する。何にでも利用される。

目的の為ならどんな『自分』にもなる。どんなに嫌なことでも笑つてやる。

少女は成長した。

もしかしたら父親の影響で自分にも才能はあるのかも知れないとさえ思つた。

だがそんな忌々しいものでも受け入れ、力にした。

少女は魔術だけでなく、『会話術』『交渉術』といった、いろいろな分野も力にしていった。

人の感情がどういうものかも、きっと理解しているかも知れない。

そんな『力』を持った少女には、いつしか組織の中並び立つ者すらいなくなってしまった。

そして少女はこう呼ばれるよになつた。

『^{アーヴィング}最大主教』と。

第一部第五話

浜面仕上は超音速旅客機の中で困惑していた。

第三次世界大戦が終わつたと思ったたら、金髪サングラスのムキムキボディ（麦野曰く『グループ』のリーダー）の巧みな話術と作戦に乗せられついてきたら、学園都市最強のレベル5や第三位の軍用クローンと合流し、さらに他の仲間と合流するといつてついてきてみたら日本刀ぶらさげたふざけた格好のお姉さん風の女性や銀髪碧眼のシスター（感情がなくなるぐらい落ち込んでる？）や煙草をくわえた長身赤髪神父にさらに、黒い修道服を着た200ぐらいいるであろうシスター軍団までいる。

（つたく一体『グループ』のリーダーって何者なんだ。同じ『グループ』の第一位ならわかるがこのオカルト要素満載の連中はなんだよ。）

「浜面、大丈夫。この人達はきっと悪い人達じゃない。」

落ち着かない様子の浜面に滝壺が声をかける。

「どうだろうね、なんだか都合よく利用されると思つんだけど。まあそれならこいつもそのつもりでいればいいし」

とりあえず麦野はこの連中と仲良くするつもりはないらしい。

浜面もそんなつもりはないわけだが、なぜかこの集団の空氣は心地

よかつた。

スタイル・マグヌスはインテックスと呼ばれる少女に寄り添つていた。

第三次世界大戦以来、常に上の空のよつた感じで、元気はなく、食欲すらないようだった。

本来の彼女を知る者なら『異常』と感じることができるだらば。

それだけ彼女は心にダメージを負っていた。

とある少年の『死』に。

(上条当麻、この子をこんな顔にさせるとはどういうつもりだ。世界を救つたといふで彼女を笑顔にできないならなんの意味もないじゃないか)

しかしきスタイルは今のこの状況の方が理解できなかつた。

突然神裂から連絡が入り、上条当麻に関わることらしいのでとりあえず言われた通りにしてみたら、神裂率いる天草式やアーニーゼ部隊が現れこの子の脱出を手伝いさせられ、おまけに学園都市の能力者共と合流し、今は学園都市に向かつてゐるのだというのだから。

そもそもいくら神裂や天草式、アーニーゼ部隊が有能だからといって簡単に抜け出せすぎなのだ。

それに追手がくる様子もない。

10万3000弾に比べれば神裂火織や天草式、アーネーゼ部隊などちっぽけなものにしかないはずなのに。

(何を考えている、最大主教。まだそちらには遠隔制御靈装があるといつ余裕か)

一方通行は土御門元春の隣に座っていた。

打ち止めの隣には番外個体が座り、仲良しには見えないがそれほど仲が悪そうにも見えない。

まあうまくやつてるに越したことはねエ、と一方通行は考えていた。

そこへ一方通行は土御門に質問する。

「あの三下は本当に行方不明なんだろオナ。

第三次世界大戦には『超電磁砲レールガン』も参加してたらしいなア、そっちの回収はいいのかよ」

土御門は真面目な顔つきで返答する

「『超電磁砲』については問題ない。別ルートで学園都市に向かってる。上やんについてはなんとも言えないにやー。あらゆる予測は立てられるけど、裏付けるものはなにもない。だがあの『幻想殺し』は簡単には死ないぜよ。あいつ自身もそうだし、わざわざあいつ

を『外』から呼び出し、メインプランにまでしたアレイスターがそう簡単に死なすわけない

土御門は寂しそうに笑い。

「オレはただ友達が死んだのを認めたくないだけなのかもれないが
な」

一方通行はなにも言わない。

「ただ上やんなら生きてる気がするんだよ。だからあいつがいない
間あいつの世界を守るのも友達として当たり前なんだ。奴等に壊さ
せるつもりはない」

第一部第六話

一方通行は土御門の話を何も言わずに聞いていた。

「アレイスターがなにを考え、今オレたちといる魔術師のトップ、イギリスつて組織の『最大主教』つて奴いるんだが、奴もアレイスターと同じで何を考えているかわからない。敵が多いし、強大だいやー。だがそれはオレたちが逃げて、そいつらに従い続ける理由にはならない。お前も最後まで戦つてくれると嬉しいにやー、まあ強制力はないからお前はお前のしたいようにすればいいんだけど」

一方通行は呆れたよつと呟く。

「今更そんなこと確かめる必要もねエだろオガ」

「でもあいつらは信用できんのかア？魔術師とかいう連中は、やつらも組織に属してんだろうが」

土御門はかつて親友に話した言葉を思い出しながら言つ。

「魔術師つてのプロつて言つても特殊部隊とか軍隊みたいなプロじゃないんだ。むしろ戦闘に関しちゃド素人だぜい」

なに？ と一方通行は怪訝な顔をする。

「これは上やんにも話したんだけどな、魔術師つてのはその魔術を使い、学園都市の最新兵器だつて平然と壊せるかもしねい」

でもな、と土御門は続ける。

「それは何の力も持たない子供に銃を持たせることと変わらないにやー。だから敵の言葉に耳を傾けるし、殺すべき敵と上に命令されても見逃したり、その敵と手を取り合つことだってあるかもしれない」

一方通行は一つのこと気にづく。

「超能力者も魔術師もたいして変わんねHってことか」

結局はそういうことだった。この魔術師たちもそれぞれ『闇』を抱え、それに抗うために魔術という力をつけたということだ。もちろん生まれつきの才能や努力の違いで力の差はあるかもしれない。だがそれは学園都市の学生と違いはあるか？

「奴らにとつて『組織に属する』ということは特に意味はないんだにやー。たまたま自分の目的が一緒だからそこにいるだけだぜい。オレたちにしたってそれは何も変わらない」

土御門は一方通行に優しく微笑みかけ、

「そもそも学園都市だ。とりあえず病院に向かうぞ。お前のよく知つてる医者がいるところだ。番外個体も怪我してるし、着いた後の戦闘で誰が傷つくかもわからない。病院の方にも手回しはしつくから安心するといいにやー。一般人を巻き込むわけには行かないしな。」

この男がこの中の誰よりも行動力があるんじゃないかと思う一方通行だった。

「

第一部第七話

少女とその妹は、少女の父親と一緒にいた。

少女は、かつて命を救つてもらった少年を救うことができず、久しぶりの父親の顔を見ても笑顔を見せることができなかつた。

父親は、少女の背負つてるものを何も聞かず、

学園都市へ帰り、とだけ告げ、

少女は、妹に身を借りる」とでからりじて、父親の後ろを歩く」とができ、妹も何も言わなかつた。

なぜ父親がここにくることができたかなんてわからなかつたが、そんなこと考えることができなかつた。

少女が考えているのは一つだけ。

かつて自分の命を救い、妹の命を救い、後輩の命を救つてくれた少年のことだけ。

考えてみれば、いつも少年とくつついていた白いシスターも少年のことを命の恩人だと言つていた。

少年はたくさん人の命を救つてきたはずなのに。

この戦争にしたつてあの少年はきっとたくさんの命を救つたはずなの。

「…。なんで。」

少年とお揃いの、少年が持っていたはずのストラップを握りしめる。

「…なんで。」

みんなが救われて、あの少年だけ救われないなんて間違つてゐる。

「…なんで。」

少年が乗つていた空飛ぶ建物はボロボロになつて、今では残骸しか残つていなかつた。

あの飛距離から落ちて、人間が生きていられるわけがない。

いくら少年がどんな困難にも、どんな強敵と戦つて今まで生きてこられたからといつても、彼は『人間』なのだ。

生死など一目瞭然だ。

しかし、

少女も希望を捨てたくなかつた。

いや、まだ捨ててないかもしねない。

あの少年なら、

あの少年なら、

必ず、

誰もが犠牲にならない、誰もが笑い合えるハッピーハンドを作つて
きた、

あの少年なり、

だが、

少女の涙は止まらなかつた。

少女は少年と話したことしが山ほどあつた。

一端覧祭のこと。

少年の抱えてこむ問題のこと。

自分が少年に対しても思つてゐること。

もう聞けないかもしれない。

「… やだ。」

もつぶ年に余つことすらできなくなつてしまつかもしれない。

最近は少年のことばかり考へてこた。

「… やだよ。」

一人でモヤモヤするのが嫌で、少年に会いにきて。

思えば、少年と初めて出会った時から少年のことを考へる時間は多
かった気がする。

もちろん今みたいな感情ではないが、無能力者の少年が第三位の自
分を負かしたのが気に入らなくて、街での少年を探すことが日課
みたいになつていた。

自分は少年のこと追いかけばかりだった。

そのくせあの少年は、ピンチの時にはいつも助けに来てくれた。

頼んでもないの。

いつも自分が追いかけてばかりなの。

普段会うと不幸だ、と言つて逃げてしまふせ。

本当にあの少年はずつること想つ。

少年のことを思い出していたら涙は止まつっていた。

少年はどうしているか分からない。

生きているのかも分からない。

死んでいるかもしない。

でも、

それでも、

少女は諦めない。

きつと少年が逆の立場だったら絶対に諦めず、最後の最後まで戦うはずだ。

少年との思い出が教えてくれる。

自分は少年のように強くないけど、

抗う権利ぐらいはある。

少女の目に魂が宿る。

「父さん、妹、ごめん。私、どうかしてた。まだあいつが死んだわけじゃない。まだ私は戦える!」

力強い少女の声に妹も答える。

「元気をだしてくれて安心しました、とミサカもお姉様と同じく元気いっぱいに言つてみます。」

父親も答える。

「お前達に足りないものは分かつてるよ。そのためにこれからみんなで力を合わせなくちゃいけないんだ」

「どうこう」とですか?とミサカは説明を求めます

父親はニヤリと笑い、

「少年が救つた世界がまた崩壊しそうとしてる。そして、その崩壊を止めようとする、一つの勢力が出来上がるとしている。その勢力と力を合わせて、再び戦争を起しそうとしてる奴らを止めるんだ」

「なに、全然わからないんだけど」

「その悪い奴らは世界を救つた少年のことを見つてるんだよ」

だからな、と父親は言い、

「その勢力と力を合わせるのが、少年を救う『鍵』になるんだよ」

「その勢力ってなに?」

「なに、すぐわかるさ。かつて少年と殴り合い、共に戦い、命を救われた人達の集まりだ」

まあ利害の関係で若干関わってないメンバーもいるけど、と父親は付け加えた。

「その勢力がどんなのか知らないけど、一緒に悪い奴らとつちめてやるうじやないの!」

「父親としては反対なんだけどね。私の娘なら大丈夫だと信じてる

よ

「学園都市に到着したら合流する手筈になつてゐる。父さんは別件があつて送つてくれとこままでしかできないからな。気をつけるんだぞ！」

「うん…」

「分かりました、ヒミツカは覚悟を決めます」

（ああ、アレイスター。反撃の時間だ。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452o/>

とある世界の主人公達

2011年1月1日23時33分発行